

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十九年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第十三卷第十一号（通巻第一五五号）

鈴



誓子

山口誓子先生追悼号

第155号

俳句雑誌

GLOCKE

3. 2007

犬ふぐり

品川 鈴子

犬ふぐりちりばめ産土の団地

日陰もの独活剥けばかく白妙に

独活茹でし香り日陰のアパートに

三尺の童身丈の独活担ぐ



先導の遺影にも椅子卒業式
卒業歌指揮の生徒も声高に
卒業生去りて来賓息をつく
遅れ雛飾る中陰満ちてより
古稀過ぎの雛になれそめ聞かせたり
過去帳の日付に弥生多かりき



玉 鈴

兵庫 秋田 直己

急カーブ電車の軋む紅葉谷
黄落の道を辿れば絵画館
高野道萩に隠るゝ道祖神
紅葉谷コンビナートを下に見る
健康を託せし医師に賀状書く

愛媛 足利 諄子

参道に来て走り出す七五三
シルバーカー押して散策草紅葉
庭になるむかごで足りる夕仕度
煎薬路地迄匂ふ年の暮
重ね着の終の仕上げの割烹着

愛媛 足利 徹

落成式神事の合間のつられ咳
咳くまいと握り拳を口に当て
短日の歯科医に長き待時間
冬枯の川に影曳く水位計
雄渾の書に眼を凝らす懐手

吟

大阪 尼寄太一郎

子が刻む大根不揃ひ千六本
クレーン車樹上の熊に出動す
コスモスの揺れに合はせて稚あやす
サングラスかざし搭乗口の妻
二十里を流れて淀の水澄めり

兵庫 荒木 治代

参拝の絶えて寺坂紅葉冷え
立札はごみ捨て禁止山粧ふ
この辺り落石注意崖紅葉
急ぎ発つ喪服に懐炉しのばせて
日没の寒さ自ずと足早に

大阪 池田 かよ

ひかり増す聖樹の星よ夕ごころ
仏飯のまじる雑炊ひとり膳
片付けるはずが散らかし冬支度
霜がこい蘇鉄こんな子沢山
ふと洩れる弱音さざんか花ざかり

大阪 石橋 萬里

手の甲にメモ書くガイド紅葉晴
日曜日値段譲らぬ頬被
獅子^シ像^ザの舌に賽銭帰り花
短日の地下に移せる八卦の灯
退屈な昼の灯台鳩潜る

愛媛 今井 忍

紅葉散る古寺に画架立て俄画家
縦の木にクレーン車来ている十二月
居酒屋の匂いで戻る忘年会
底冷えの椅子に削らる糸切歯
冬の蜂跨いで帰る検針婦

香川 齋部 千里

闇汁の箸をすべりし丸きもの
道問へば讃岐なまりも石路の花
冬木立梢を揺らし鳥翔てり
御手洗に賽銭沈む紅葉寺
大注連をつくる狩衣たくしあげ

兵庫 浮田 胤子

ユリの木の落葉踏む音カシヤカシヤと
老犬の白内障や年の暮
お正月トランプのジャック恋ふ少女
凍鶴に泥鰯をやりに行きし事
今は昔心齋橋で墓飼ひし

兵庫 馬越 幸子

廃れ窯には木枯らしの火吹竹
石垣に嵌めし陶片里時雨
凧の通り道なる陶の里
窯元は薪長者にて冬うらら
窯出しの心待ちなる日向ぼこ

大阪 大井 邦子

遅刻せし夢の続きに布団干す
湯豆腐やまた会ふ日など聞かずとも
浮島の堂に寄りつく落葉舟
繕ひの槌音高く神の留守
敷台に末社を移しすす払ひ

薬草歳時記

(一五四) アセビ 馬酔木

菅原由紀

花馬酔木春日の巫女の袖ふれぬ

高浜 虚子

日本各地、山形宮城から南の四国九州に至る暖かい乾燥した丘陵に多い2〜4mの常緑低木。庭園樹、公園樹として栽培されている。3月から4月の晩春に枝先に白いすずらんのようなつぼ状の小花を下向きに密につける。

全体に毒性を持ち、枝や葉は苦味質のアセポトキシン、ガラヤノトキシンⅢ、アセボチン等、花にはクエルセチン、毒性の強いピエルトキシンABCを含む。毒性成分の作用は激しく、誤食すると腹痛嘔吐下痢。呼吸麻痺をおこして死亡に至ることもある。

牛馬の皮膚の寄生虫の駆除、農業用殺虫剤、ウジ駆除等。他に農作物の害虫駆除等。

使用法は乾燥した葉を10倍量の水で煎じ半量に煮つめ、水で10倍に薄め、さまざまして農作物に散布する。哺乳類の他

に昆虫に対しても毒性をもつので、化学農薬登場前には殺虫剤として用いられていた。

馬酔木の名は、牛馬が誤つてこの葉を食べて麻痺することによって由来する。奈良公園の馬酔木は有名だが、鹿は毒のあることを知っていて食べない。日本に本来生息する動物達はアセビに毒のあることを知っているのだ。

アセビにはアセボ、ウマクワズの別名あり。また方言も150位あり、ウシアライ、ウシノシラミトリ等。

アセビとは心地良いひびきのある言葉で、千二百年も前の万葉時代から、歌に物語に詠まれている。

万葉集には十首。

〈をしの住む君がこの山齋し今日見れば安之婢あしひの花も咲きにけるかも〉(巻20—45) この中の山齋とは庭をさしていて、アセビが庭木として栽培されていたことがわかる。

もう一首アセビを詠んだ有名な歌。〈磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめと見すべき君がありと言はなくに〉(巻2—16) 大津皇子を偲んで大來皇女が詠んだ歌で、広く知られている万葉の歌である。

白いすずらの花に似た花々と奈良公園。遠い万葉の馬酔木に毒性よりもロマンを感じてしまう。

参考文献 (原色新訂) 「牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「植物ごよみ」 湯浅浩史 朝日新聞

「万葉の花鳥風月」 大貫 茂 淡交社

著者略歴 神戸薬科大学卒

アセビ (アセボ、ウマクワズ) [アセビ属] (つつじ科)

Pieris japonica (Thumb.) D. Don

あしび
馬酔木

花期：
3月～4月

さく果

さく果

須賀
悦子画

1月末六甲山にて

薬用部分：茎葉

花の断面図

E.S.

馬酔木咲くや奈良の古山かくはしう
 藁馬にしてふぐり持ちけり馬酔木咲く
 馬酔木より低き門なり浄瑠璃寺
 花馬酔木雨はうつぼ柱に鳴れる
 中尊寺道白珠の馬酔木咲く
 春日野や夕づけるみな花馬酔木
 花あしび朝の葉に命継ぐ
 木がくれし鹿かへり來ず花馬酔木
 花馬酔木実のなるものとならぬもの
 花馬酔木千代の連歌碑読めずして

松根東洋城
 長谷川かな女
 水原秋桜子
 山口 誓子
 秋元不死男
 日野 草城
 角川 源義
 桂 樟蹊子
 須賀 悦子
 野口喜久子
 ぐろっけ

鈴の奏

品川鈴子選

極月の人みな吾を追ひ越して 兵庫 平川 倫子

北向きの獸舎の鶴の風当り

冬日影弔の札懸く空き獸舎

白ふくろう樹立ちの中に放ちたし

初時雨形見の傘をそつと差し 兵庫 藤井久仁子

引継ぎを済ます世話役冬晴るる

畳替二階部屋まで香り立つ

献立を決め兼ねてをり毛糸編む

街師走封切館に人疎ら 大坂 北川 光子

暮易し足に擦り寄る迷い猫

池田炭グラム単位で売る老舗

阿波の木偶鼓で哭かせ暮るる秋

一步づつ紅葉踏む音退院す 香川 大空 純子

姫椿夜勤の夫を出迎える

ラップ調までも歌えず年流る

婚礼は近親者のみ花アロエ

カーテンに梯子の影絵松手入 兵庫 恒成久美子

湯あがりの舌にとろける熟柿かな

伊の美女が吟ずる詩歌クリスマス

人波にじつと佇む鹿老いて

時効なる話のはずむ忘年会 兵庫 明石 文子

猪口一杯医師もすすめる温め酒

冬の月家路を急ぐ影美人

虎落笛取り残されし山の宿 兵庫 岩崎可代子

風評に身を縮ませる鍋の牡蠣

泥縄を抜け出せぬまま年用意

初孫と床暖房に四肢伸ばす

縄跳に十三人の息合はす

落葉掻く跳ねては嵩を減らす児と 大坂 角谷美恵子

尼寺は拝観謝絶冬隣

いささかも動かぬ水車落葉時

寺柱ささへる鋼時雨冷え

洞川の水澄むほとり行者宿 兵庫 森山八重子

にぎり酒みな童心の顔になり

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評
四句〜十五句 岡本幸枝 //

*選句は全て 品川鈴子

北向きの獣舎の鶴の風当り

平川 倫子

捕らわれの檻暮らしで、しかも広い獣園の北向きの鳥舎が棲み処ともなれば、端麗な鶴といえども北風曝しに逆吹かれて、羽繕ういとまも無く、尾羽打ち枯らす有様。その哀れな姿に運不運を感じる優しさ。

献立を決め兼ねてをり毛糸編む

藤井久仁子

三六五日に三度々々の食事を、心を籠めて整えて、もう長年経つ主婦に違いない。料理も編物も取り立てて考えなくても、素材を見れば自ずと手が動き、家族好みの献立が出来る。家事万端にベテランの技ゆえに、そぞろ迷いのひと時。

池田炭グラム単位で売る老舗

北川 光子

池田はかつて清酒と木炭で有名。当時から池田炭を手広く商った店では、昔は一俵二俵と数え尺貫で量った炭を、

グラム単位で扱うご時勢。でも茶人文人や炭火を使う料理屋などは、わざわざ老舗から求める。やはり良い文化は、こころ在る人達が惜しみ伝えてくれている。

ラップ調までも歌えず年流る

大空 純子

ラップは七十年代に盛んになったアメリカ黑人音楽の一つのジャンル。比較的スローな重いビート、四拍を刻み続けるベースラインにのせて歌詞をしゃべるように歌う。七五調唱歌が身に沁みた世代には、どれが頭や尻尾やら捉えどころがありません。ラップを歌われる作者の若い感性に拍手、エールを送りたいと思います。

人波にじつと佇む鹿老いて

恒成久美子

鹿は神様のお使いとか。奈良春日大社の鹿の角切りは大勢の見物客で賑わう。鹿笛が鳴った後も帰らずに、その見物客を見物にくる鹿が必ずいる。大抵は白毛の目立つ長老格で「早くお帰り」と、高つてもじつと佇んで人並みを見て

います。まるで哲学者のような面構えで。

虎落笛取り残されし山の宿

明石 文字

強い北風が宿の竹垣に吹きつけ、ひゅーひゅーと笛が鳴るように音を立てている。その音を聞いていると心の中まで風が吹き込むようだ。好んで選んだ山の宿なのに取り残されたように淋しくなってしまう。作者の気持ちを考え、ふと、山形県肘折温泉の宿を思い出しました。新庄から乗ったバスは悲鳴をあげながら、七曲がりの山道を登っていく。周りは漆黒の闇で一寸先も見えない。夜がこんなに暗いものだったとは。何だか下界から取り残されたように感じたものでした。

風評に身を縮ませる鍋の牡蠣

岩崎可代子

BSE、インフルエンザ、賞味期限など食品絡みのトラブルが多発している。自分のせいでもないのに、大量に処分されるのをニュースで見ると胸が痛む。牡蠣は水分が多く熱すると身が縮む。湯気の中で縮んでいく牡蠣にも、俳人の目は注がれる。噂の渦中にある牡蠣の身に置き換えて

の一句。海のミルクといわれる牡蠣は、ビタミンやミネラルが豊富で寒い日には何よりのご馳走。

尼寺は拝観謝絶冬隣

角谷美恵子

秋も終わりに近づくと目前に冬がそばだっってくる感じ。一人暮らしの尼様は、臥せっておられるのでしょうか。声をかけても白障子はピタッと閉じられたまま心えの気配もない。見れば、利休下駄が一足爪先向けて靴脱ぎ石に。「謝絶」に尼様の意思を感じ取った作者は、落ち葉を踏みしめながらも来た道へ。それとも尼御前はかなりの気むずかしやさんなのでしょうか。

紅さしてジムへ手櫛の木の葉髪

森山八重子

ジムナジウム。主にボクシングの練習場をいったが、最近は女性のためのエクササイズに使われるようになりファンが増えている。雑事の合間をぬって大急ぎで紅をさし、木の葉髪（ご謙遜）を手直ししながらジムへ。すぐに汗だくになるとわかっていても、身だしなみを忘れない女の心意気。それにしてもご立派。ご立派。